

第三夜 吉田のおばちゃんのラブソング

「問題はもう一つの方や」

吉田のおばちゃんは言葉を切ってぐびりと焼酎のグラスをあおった。

「最近、耕作ちゃんの浮気が発覚してん」

暗い目をしておばちゃんはぼそりと言った。

「ええっ」

驚愕の色が走ったしのぶの顔は一気に怒りで真っ赤になる。

「何ですかそれ。最低やん。おばちゃん、そんな男とはすぐ別れた方が良えですよ」

しのぶはおばちゃんの袖をぎゅっと掴んだまま捲くし立てた。

*

朝から間断なく小糠雨が降っている。六月とは言いながら日暮れ近くにじつと立っているると身震いの一つも出るような肌寒い空気が静かな住宅街を包んでいた。遠くの教会で五時を報せる鐘が鳴り始める。夏至が近いので、あたりはまだ十分に明るく鐘の音は町の静寂を破ることなく優しい音色で雨ごと街をくるみ込んでいくようだ。

東西に伸びる細い路地の端、雨脚のカーテンの向こうに大きな人影が立った。いつもは夕陽を背に疾駆してくる仁王のような大男が今日はゆったりと歩い

てくる。それでも歩幅が大きいので瞬く間にその巨体は大きく迫る。手に持ったコンビニで五百円といった風情のビニール傘はおもちゃのように小さく雨を避ける用をまるで果たせていない。スウェットシャツの肩はじつとりと雨が滲んで色が変わっていたが、男は無頓着な様子で規則正しい歩調を乱すことなく歩いていった。

鐘が止んだ。路地の中ほどで小さな朱い光がぽっかりと浮かび上がった。達筆な墨跡の『酔鏡』という文字が浮かび上がる。男の歩調が心なしか速くなつた。灯つたばかりの赤提燈を過ぎすと格子戸にかける手ももどかしく男は立つつけの悪い戸を力任せに開いた。

「うっしやあ、一番……」

関との声を上げガツツポーズを決めようとした男は、店の中に先客を見つけて中途半端に固まった。

「残念やったなバリキ。あたしが一番や」

革張りの丸椅子に腰かけた先客は、くるりと椅子を回して振り返ると底意地の悪そうな笑い方をした。

「なんで吉田のおばちゃんがおるねん」

へたれたダイダラボッチのような顔つきでバリキは吉田のおばちゃんを見下ろした。

年は五十半ば。きついおばちゃんパーマをあてた髪は、緑、紫、黄に部分染めされていて、大きな丸顔に細い目とちまちまとした鼻と口が乗っかっている。目の覚めるような原色オレンジのブラウスに金色のパンツという出で立ちは、『派手さが美德』という生粋の関西のおばちゃんの信条を余すところなく具現化していた。腰を下ろしていても充分威圧感のある巨体で、身長は百七十そこそこながら体重は百キロ超えという噂だ。

「なんでって、ボランテアに決まってるやん。流行らん店が潰れんようにお金落としに来たってん。雨降っててヒマやったし」

おばちゃんのアルトの低音は普通に喋っていても凄味がある。

「その言い方は誤解を生むで。晴れとっても曇ってもおばちゃんヒマしてるやん。そやのうて、いつもはどこぞで呑んでこの店に来るんは八時回ってからやのに、なんで今日に限ってちゅうこっちゃ」

「雨の日に遠出はしとない」

「あーあ、なんちゅうこっちゃ」

大仰に天井を仰いでからバリキは丸椅子に尻を乗せた。椅子が悲鳴を上げて抗議する。

「ほい、一番ビールや」

小太りの主人がおばちゃんの前にジョッキを置いた。主人の流儀で、その日

の最初の客の一杯目は主人の奢りとなる。意気揚々と駆けつけたバリキは敢えなく『一番ビール』を取り逃がしてしまった。

「だいたいフライングやで。五時前からおったやろ」

「安心し。一番ビールは五時まで待ったから」

旨そうにビールを半分ほど干してからおばちゃんはけるっと言った。

「ほい、二番ビール」

主人の厭味な笑いに反論する気も失せてバリキは黙ってジョッキに口をつけた。何も言わなくても客の嗜好を熟知している主人が絶妙の呼吸で出してくる酒が心地好い。

「付け出しはちよっと変わってるで」

黒い小皿に小さく切った木綿豆腐。その上に削り節と黒い味噌のようなものがこんもりと載っている。

「なんやろ」

言いながらバリキは箸で崩して口に入れた。途端にほろっと苦い風味が広がり後から辛味がついてきた。

「渋いアテやな大人の味って感じや」

「春頃に作っとなったふきのとう味噌の出来が良いんで出してみた。俺はもって苦い方が好きやねんけど苦手な人もいてるからあく抜きはしっかりめにして

る。で、今日のテーマに合わせて後から山椒を混ぜ込んでるねん」
主人の背後には小さなホワイトボードが掛かっていて相も変わらずそっけない言葉が一言書かれていた。

お品書き

辛いもん

「辛いもんで……辛いもんやわなあ」

バリキが当たり前のことを言いながら首を傾げる。

「良えキムチが入ってん。あと明太子の切り子が安かった。それやこれやで辛い料理を作りましたいうこっちゃ」

「腹減ってるねん。なんぞお腹が膨れるやつないか」

「あたし、あれな。東北行った時に食べた納豆キムチ。めっちゃ美味しかったん」

「げっ、出た。このえせ関西人。納豆みたいなもんよう食べるな」

「ふっるう。今は大阪のおばちゃんでも納豆たべます」

おばちゃんは空になったジョッキを振って麦焼酎の湯割りを頼んだ。

「よっしや。九州のお客さんに教わった納豆キムチの上級バージョン出したる」

ジョッキを受け取りながら記憶を手繰るように一瞬目を宙に泳がせて主人が言った。

酔鏡にはレギュラーメニューがほとんどない。その日の品書きは仕入れの内容と主人の気分で決まる。店のホワイトボードには料理のテーマしか書かれていないので客は首を傾げながら、食べたいものを感覚で伝えることになる。『揚げ物が欲しい』、『焼き物を』、『何かさっぱりしたもんできる?』、『むっちゃ、おなかすいてるねんけど』――。

不思議なことに応えて出される料理に客が失望することはまずない。嗜好を熟知している常連ならいざ知らず、初めての客でもそのニーズをピタリと当ててしまう主人の慧眼は長らく客達を不思議がらせている。

「こんばんは」

格子戸が小刻みに揺すられながら開き、小さな声がした。出てくる料理を想像しながら首を傾げていたバリキはセンサーに反応したように入り口に首を捻った。

「おっ、しのぶちゃんいらっしやい」

入り口に立ったしのぶはバリキに声をかけられて行儀よくその場でお辞儀をした。頭の後ろでポニーテールが揺れる。桜色のリボンが雨に濡れて光っていた。よく見ればリボンだけでなく、髪の毛の端から、肩から、ブラウスの袖

やスカートの裾からも雨粒あまつぶを滴らせてしのぶは濡れねずみで立っていた。トレードマークの銀縁メガネはびっしりと雨滴を浮かせていて、ほとんど前が見えていない。

「ええっ、どないしたん？朝から雨降ってたやん。傘持ってなかったんか？」
バリキがどこかで事故にでも遭ったのかと言わんばかりに気遣わし気な声を上げる。

「いえ、さつきまでは傘を持っていたのですけど……」

しのぶの声が消え入りそうに小さくなる。

「電車に傘を忘れた気きの毒なお婆ちゃんがいらっしゃったので傘を貸してあげたんです。駅からここまでならそれ程濡れないかなあと思っていたのですけど……」

まるで叱られた子供のようにしのぶは唇をきゅっと噛んで俯いた。しのぶのキヤラを考えずに心配した自分がアホらしくなったと見え、バリキの肩は一気に撫で肩になった。

「あのなあ。人が良えのもたいがいやで。駅員さんに話したら済むことやん」
「あっ」

「どうやら、しのぶにはない発想だったらしい。雨滴を浮かせた頬が微かに朱くなった。「えっ？なにになに？どないしたん？」

撫で肩になったバリキの肩ごしに吉田のおばちゃんがひよいと顔を覗かせた。

「あつらあ」

おばちゃんのアルトがオクターブ跳ね上がってバリキをギョツとさせた。

「めちやめちや可愛いお嬢ちゃんやん。ちよつと、バリキどいてんか」

おばちゃんは立ち上がると巨大なバリキの背中を押し退けてカウンターの後を押し通るとしのぶに駆け寄った。前が見えていないなりに何か不穏な巨体が迫ってくる恐怖を敏感に感じ取ったしのぶは「ひっ」と喉で息を詰めてたじろいだ。

「ほんまなんちゆう言い草や。こんなちっちゃい子が親切からしたことを小馬鹿にしくさつて。そや、ちよつと待ち」

おばちゃんは本気の混じった拳でバリキの背中をどやすと自分の席に戻った。不意を衝かれたバリキは「ぐっ」と息を詰まらせてカウンターに突っ伏した。

おばちゃんは足元に置いた大きな紙袋から特大のスポーツタオルとカラフルなハンカチを引っ張りだすとのぶに駆け戻る。再三の攻撃による学習効果と持ち前の反射神経を活かしてバリキは第三波の鉄拳をかわした。

「ほんまになあ。寒かったやろ。けど、あんたの親切は間違うてないで。自分

が寒い思いしてでもお年寄りを労る。今日日なかなか見られん光景や」

おばちゃんはタオルをすっぽりとしのぶに被せるとわしわしと拭いてやりながら言う。涙ぐましいセリフとは裏腹におばちゃんの顔は妙に嬉しそうに輝いていて、手付きが微妙にいやらしい。

「げっ、おばはんまさか」

「なんやのん。まさかて？」

「ロリコン？その顔で？」

おばちゃんは穢らわしいものを見る目でバリキを睨むと殊更に力を入れてしのぶの体を撫で回す。

「子供好きというて」

「いや、どう考えてもその手付きはちやうて」

タオルの下でうっとか、あつとか声を上げながらもがいているしのぶは傍から見ると獰猛な野獣に手込めにされている幼い少女のようだ。

「よっしやええやろ」

タオルを剥がすと少しこざっぱりとしたしのぶが現れた。

「あっ、ありがとうございます」

「かあいいっ」

糸のようにか細いしのぶの声におばちゃんは少女のようなソプラノを張り

上げて身を振らせた。見てはいけないものをみてしまったバリキと主人は慌てて目を逸らした。

「よっしゃ。メガネも拭いたろ。貸してみ」

主人とバリキが声を上げて止めに掛かったが間に合わず、おばちゃんはその顔からメガネを外してしまふ。

「あっ」

しのぶが声を上げた。男達は固唾をのんでその桜色の口元を見詰めていたが次の言葉が発せられることはなかった。おばちゃんはレースのフリル付きのカラフルなハンカチでメガネの雨滴を拭うとしつこいくらいに何度も息を吐きかけてグラスを拭いた。

「はい、拭けたで」

メガネをしのぶに戻してやった時、その猫撫で声がいかに名残惜しげに聞こえた。

「ま、座り。あんたも災難やったな。雨宿りに駆け込んできたのがこんなしよぼい呑み屋で。ほんまはドライヤーがあったらもっと良えんやけど」

おばちゃんはそのしのぶのポニーテールの先をいじくり回しながら、主人の五分刈りの頭を見遣ったが期待するだけ無駄かと首を振った。

「本当にありがとうございます」

しのぶは子供が熊を見上げるような目付きで上目遣いにおばちゃんを見上げてから丁寧^{ていねい}に頭を下げた。

「行儀の良え娘やなあ。今日日のお子とは思えん。親御さんの躰^{てま}が行き届いてるんやな」

おばちゃんは目の前の丸椅子にしのぶを座らせるとすかさず隣に陣取る。

「なあなあ、まだ雨止まへんで。さすがにお酒^{さけ}いうわけにいかんやろけど、おばちゃんがなんかあったかいもんご馳走^{ちしう}したろ。後でちやあんと送ってつたげるからな」

店を出たらそのまま連れ去りそんな勢いでまくし立てるおばちゃんの厚意を「いえ」とか「あの」と言^いって何とか断ろうとするしのぶだったが、まごまごするばかりで一向に埒^{らち}があかない。

「おばちゃん、なあて、おばちゃん。水差すようで悪いんやけどその娘、たま^{たま}雨宿りに飛び込んで来たんちゃうで」

見かねて割り込んだバリキをうるさそうにおばちゃんは振り返る。

「たまたまやなかったら何やの？バイトか？そら児童福祉法^{じしょうふくしほ}にひつかかるからあきまへん。だいたいこの店はいつからバイトを雇^こえるほど繁盛^{はんせい}するようになったん？」

歩く児童福祉法違反のおばちゃんが反論する。

「そやのうて、その娘は客や」

「あのなあ、いつからこの国は中学生が酒呑んで良えようになったんや」

「あーあ。結局またその話やねんな」

面倒臭気な言葉と裏腹にバリキはにやにや笑う。

「あのな、その娘は今年の一月で二十歳になった立派な大人やねん。選挙も行くし、競馬やパチンコかて……、ま、行かんと思うけど、行こ思うたら行ける歳やねんで」

おばちゃんは怖い物を見る目でしのぶを見詰めた。

「ほんま？」

「あの……、はい。すみません」

なぜかすまなさそうに詫びるしのぶの肩からおばちゃんは慌てて手を離れた。

「あの、熱爛をお願いします」

ようやく魔の手から開放されたしのぶは主人の方を向き直るとおばちゃんに遠慮するように小さな声で定番を注文した。

「ほいよ」

主人の小気味良い声が響き、すかさず徳利と猪口が並べられる。注文を待ち構えて段取り良くスタンバイしていたあたり如何にも主人らしい。

「ほい付け出し」

黒い小皿に盛られた付け出しの匂いをくんと嗅いでしのぶは「あっ」と言った。

「ふきのとう味噌ですね」

「よう知ってるな」

「母がよく作ってくれました。懐かしい」

しのぶは箸を取って一口含むと小さな目を瞬しじみたいて嬉しそうな顔になる。それから徳利から猪口へ、猪口から口元へ、流れる所作で今日の一杯目を流し込む。白い喉が小気味良く動き、ほう——と小さな吐息を吐いた。そして、銀縁メガネをずり上げるとおばちゃんを見上げた。

「タオル本当にお世話さんでした。けど、中学生はないんちやいます？あたしどこから見ても大人の女ですよん」

唐突に甲高い声で捲くし立てられたおばちゃんは椅子を軋ませて仰け反った。

「けどこんな可愛い娘がこないな店に来るやなんて世も末やな」

しのぶの年が発覚しても中学生然とした風貌はまんざらでもないとみえて吉田のおばちゃんはしのぶの隣に席を移して呑み始めた。

「世の中何が起こるか分からん言うてくれ」

切り返すバリキの前に小振りの深皿が出される。舟形に折ったアルミホイルに男爵芋が載っている。十字に入った切り込みに明太子が盛り付けられ、ぷんとバターの香りがした。

「じゃがバター明太。じゃがバターの辛口アレンジや」

「なんや北海道と九州の物産展みたいな料理やな。おっ、でもこれイケるわ。明太子とバターって意外と合うんやな」

感心しながらバリキは瞬く間に半分ほど平らげる。

「で、おぼちゃんにはこれや」

出された黒い深鉢をおぼちゃんが覗き込む。

「へえ、キムチと納豆にイカそうめんかいな」

「ポピュラーかどうか知らんけどそのお客さんはそないやって食べる言うてはってん。試してみたら結構イケるねんなこれが。よう混ぜてから食べて」

主人に言われておぼちゃんは箸を突っ込むと親の仇のような勢いで混ぜ始めた。

「えーと、あたしはちよこつとしたおかずみたいなんが欲しいんですけど」

「そやなあ、ほな餃子でもどないや？」

しのぶのリクエストと頭の中のレパートリーを照合させながら主人が尋ね

る。

「あ、それお願いします」

「なあなあ、どこ勤めてはるん？お給料なんぼくらい？彼氏とかいてへんの？なんでこないな店に来るようになったん？」

「いやいやいや、そないマシガンみたいに訊かれても困りますやん。えと、しのぶ言います。一月から来さしてもろてます」

「あ、あたしも自己紹介まだやったな。初めまして。吉田のおばちゃん言います。JRの近くで好み焼き屋やっています。あと、趣味で株をちよこつと……」

「しのぶちゃん騙されたらあかんで。このおばちゃんの場合、趣味で好み焼き屋やってる相場師やねんから。ユウやんから聞いたことあるけど結構名の知れたデイ何ちゃらしいねん」

「デイトレーダーか？」

「いらんこと言わないやという目でバリキは睨まれてしまった。

「あたしのことはよろし。あたしはしのぶちゃんのことを知りたいねん。仕事何してはるん？」

「大学で事務員やっています。この前の秋にお父さんが勤めてはった大学で募集されたん見付けて飛び付いたんですわ。中学出てからコンビニとかマクドとかダイレクトメールをポストに入れてくバイトとかやったんですけど、あたし内

気ですやん。それにトロい言われてすぐダメになるんですわ。ひどいでしょ。ちよっとおっとりしてるだけですやんねえ」

そのマシンガンのような口調で内気と言われるとツツコミたくなるがバイト中は素面しらふだろうから、その通りなのだろう。

「いやっ、もしかしてご両親亡くさはったん？」

聞きづらいことをしれっと聞いてしまえる厚かましさは関西のおばちゃんの特権か。思いの外不躰に聞こえないのは会話のテンポの妙だろう。

「はい。お父さんは震災のときに。大学で被災して。お母さんは一人であたしを育ててくれはったんですけど、中三の年末に病気で」

店の中が黙りこくる。主人が餃子のフライパンに水を差す音が大きく響いてその沈黙を割った。

「ら、ら、いややな暗い話になってもた」

「気の毒なんちゆうもんやないやん」

メロドラマのヒロインにいきなり出くわしたかのようにおばちゃんは目に大粒の涙を溜めて、しのぶの小さな手を力任せに握った。

「いやいやいや、別に『同情するなら金をくれ』いうような生活してるわけやありませんし。お母さん結構お金遣してくれてはったからあんじょう食べていけますもん。しっかり定職もゲットしたし」

「あのお父さんが勤めてはったんで、もしかしてセンセと同じところか？」
バリキが大学の名前を言うとしのぶは目を輝かせて頷いた。

「そうそう、そこです。お父さん数学科の助手やってはったんです。あっ、もしかしたら子供の頃あたしもセンセと会ったことあるかもしれませぬわ。よくお父さんの研究室に遊びに行ってたし。おっ……、その影響かあたし数学だけはずっとクラスで一番でした。よっ……、いつかあそこで働いたら良えなあと思うようになって、去年ほんまに就職ゲットして、つと……、絵に描いたような薄幸の美少女のサクセスストーリーやて思わはりませぬ？」

妙な合の手を入れつつ手元をじたばたさせていたしのぶは、ようやくおばちゃん为天狗の団扇のような手のひらからすり抜けた。

「けど、頼れるような身内の人はいてはらへんの？」

おばちゃんの言葉にしのおは微妙かに肩を震わせたように見えた。目の前の猪口を乱暴に掴むと中身を勢い良く流し込む。

「お母さんの両親がいてますけど、あたしには関係ない人達ですから」

まだ何か言いかけのおばちゃんを制するように白い平皿がしのぶの前に置かれた。

「お待ちどおさん。辛い餃子や」

味は付いてるからそのままだと説明しながら主人の目はおばちゃんの方を

向いていた。

「おばちゃんも大概やで。呑み屋で人様の素性を根掘り葉掘り聞くんは野暮い
うもんや」

言葉は柔らかいが有無を言わせない響きが籠もっていた。

「あ、ほんまや。堪忍なしのぶちゃん。しようもないこと聞いてしもて」

ケロツと言つてのけて吉田のおばちゃんはしのぶに片手拝みした。お詫びは
一瞬で済みというのが如何にもおばちゃんらしい。

「バリキ何ぞ気分直しにおもろい話でもしてや」

「なんで俺に振るねん」

「そやかて、あんた男やろ。この場の雰囲気をなんとかしたろとか思わんか。
ふつう」

よく分からない理屈である。

「急に言われたかってなあ」

「使えんやつちやな。そやなあ……。なんぞロマンチックな話でもないかいな」
おばちゃんがネタを繰っている横でしのぶは餃子に取り掛かっていた。

「うわっ、これめっちゃ辛いやないですか。中身何ですのん？あ、わかった豚
キムチや」

「当たり前やな。けど豚肉とキムチだけやったら味がきついから、生姜と葱を刻

んだやつに卵黄も足してごま油で風味付けしてるねん」

「それで辛いけど微妙にマイルドなんですね。今度家でも拵えてみよかな」

隣でおばちゃんが空になった深鉢を戻しながらちらちらとしのぶの手元を見遣る。

「餃子も美味しそうやねんけどな。もうちよつとボリュームのあるもんない？」

主人は軽く頷くと、ちよつと待つといてと言った。

「そうそう、あたし最近ジクソーパズルにハマってるねん」

「ようその気い短い性格であない辛気臭いもんできるな。だいたいキャッチャーミットみたいなその手ではピースが摘めんやろ」

「んなわけないやろ」

「あつ、間違うてるピースでも力づくで押し込めるいう技が使えるんちやいます？けど、そんなことしたら出来上がった絵がおかしうなってしまうですよ」

「しのぶちゃんまで何言うてんの。誰もあたしのクリスタルガラスみたいな性格理解してくれへんねんな。繊細で緻密でジグソーパズルみたいな作業させたら灘区一やねんで」

微妙にエリアが狭い。

「最近は三千ピースのノイシュバンシュタイン城に挑戦してるねん」
「それめっちゃ上級クラスなんちやうん？」

主人がフライヤに種を放り込んでから振り返る。ジュツと旨そうな音がした。おばちゃんの注文らしい。

「で、そのどこがロマンチックな話なん」

「いや、この前お好み焼き屋のお客さんからロマンチックな話聞かされてん。何も印刷してない真っ白なジグソーパズルというのがあるんやて」

「どや？とばかりに、おばちゃんは首を巡らせて主人やバリキの反応を見る。

「なんじゃそら。単なる印刷ミスやろ。返品せなあかんやつやん」

「わかつたらんなあ。わざと何も印刷してないんやて」

「あ、わかつた。レアもん狙いやな。ちよこつとだけ作って噂流しといて値を吊り上げるんや。それで一儲けしよいうセコイ魂胆やろ」

「んなわけあらへんやろ」

「あ、都市伝説なんちやいます。噂には聞くけど実際には誰も見たことなくて、それを手にした人は一週間以内に死ぬとか。死にたくなかったらそのジグソーパズルを別の人に見せんとあかん言うやつでしよ」

「どこがロマンチックやねん。そやのうて普通に店で売ってるんやて。でな、買うてきたそれを組み立ててやな、イラストとかメッセージを書くねん。で、また全部バラして箱に戻してメッセージを伝えたい人に贈るいうわけや。受け取った人はパズルを完成させんとメッセージが読まれへんいう仕掛けや」

「うわあ、めっちゃロマンチックですよ。大きな髑髏の絵にK I L L Y O U! とか書いて——」

「そうそう、ムカつく奴に贈ってな。受け取った奴はパズル完成させた途端ブチ切れる——って、どこがロマンチックやねん。しのぶちゃん頼むからあんたの清純なイメージ壊さんといて」

吉田のおばちゃんはまなじりに涙を溜めつつ口をへの字に曲げてしのぶを見詰めた。

「いや、ウケるんちゃうかなて」

「ウケる意味がちやうやろ。その状況で受けてるのんは果たし状や」

「バリキさん上手い。座布団一枚」

指を一本立てて言って、しのぶは最後の餃子を口に運んだ。

「あの何かお魚の料理できますか？」

しのぶのリクエストに主人は首を縦に振った。バリキはまだ食べ足りないらしく「なんぞご飯もんを」と注文する。

「けど、吉田のおばちゃんってロマンチック好きなんですな」

しのぶが変な日本語で言った。見かけによらずという言葉をバリキと主人は心の中で反芻した。

「そら夢見る乙女やもん」

恥ずかしそうに体をくねらせると椅子がギシギシ軋む。目を逸らしそこねたバリキは慌てて目を瞑り黙祷するような顔つきになった。

「『純愛』とか『青春』という言葉が大好きやねん。おぼちゃんの愛読書な『富士見ファンタジア』と『コバルト文庫』やねんで」
「へえ」

こと、ロマンチックとか恋愛という言葉には過剰反応するしのぶの目がうつとりと潤んだ。

「ハーレクインロマンスみたいなんは嫌いや。不倫なんて最低や。美しくないもん。おぼちゃんは大恋愛の末に苦難と障壁を乗り越えて結婚してんで。なあなあおぼちゃんのラブロマンス聴きたいやろ」

すかさず「聴きとらない」と抗議しようとバリキは振り返った。が、しのぶは「聴きたいですう」と目を潤ませている。乙女二人の間では合意が成立した後だった。主人は冷蔵庫に物を取りに行くのにかこつけて心持ち乙女達から遠ざかった。

「あたしの初恋てな、中一の時やねん。結構遅いやろ。でもこれにはわけがある。小一の時のひっどいトラウマで小学校の間中、恋愛恐怖症になっとな。ま、あたしにいわせたら思春期より前の小学生が言うてる初恋なんて、そもそも恋のうちに入らへんねんけどな」

三杯目の焼酎に口をつけながら酸っぱいものを呑み込んだようにおばちゃんには目を瞬かせた。

「うちの実家な戦前は神戸の西の方で大きな農家やっててん。まあ地元では名士言われる家柄や。戦後は、お父ちゃんが目端が利く人で農地改革喰らう前にさっさと財産整理してそのお金で日本料理屋始めてん。従業員が何人もいてる大きなお店^{たな}。お父ちゃん面倒見の良え人やったし、たちまち近所一帯のリーダーや。自治会長もやっててんで。小学校に上がった時分は昭和三十二年で、食糧事情もマシになって店はよう流行っとった」

焼酎のグラスを手の中で回しながらおばちゃんは照れたようにしきりに肩を揺すっていたが堪えきれなくなつたみたい「ぐふふふ」とくぐもつた笑い声を口から吹き出した。

「なんやねん。その食用ガエルみたいなドスの利いた笑いは」

「せやからな。あたしな料理屋のお嬢やってん」
恥じらうように巨体を揺すつた。

「ちっちゃい頃から蝶よ花よと可愛がられて。ま、実際可愛かってんけど。それに絵に描いたような優等生やったからクラスでも目立つ存在やった。足し算カードでも書き取りでも人に負けたことなかったし、運動やらせてもクラスで一番で、走るんかて男子に負けたことあらへん。参観日いうたら先生から朗読

の指名されるような優秀な生徒やった。まあ、クラスのリーダーやな」

『ボスやろ』おばちゃんに聞こえないようにバリキが主人に囁いた。

「けどな栄光の日々は長くは続かんかった」

グラスを握るおばちゃんの手にくつと力が籠もった。不穩に肩の筋肉が盛り上がる。

「あの悪魔が転校してきたんは二学期の始業式の日や。生田区の山手の方のお屋敷の子やってんけど親戚に預けられてとか言うとった。もやしみたいにひよろひよろしてて、背えばかり高い男子やねん。あたしの隣の席になってんけど鼻でふんて笑ろたわ。ええとこのボンボンがこないにワイルドな学校でやってけるんかいって。頭は七三に分けてなんや良え匂いの整髪料付けてるし、着てるもんはいちいち私学の制服みたいにちゃきつとしてるねん。おまけに自己紹介で巨人ファンや言うた瞬間クラス中を敵に回した気がした。極め付きがそいつの名札や。名前の横に厭味つたらしうローマ字が書いてあってん。しかもいかにも自分で書きましたて見せつけるみたいの子供の字で。後で聞いた話やけど、父親が外務省に務めるお役人で家で習うとったらしい。けど、小学校の一年生がアルファベット読めるかいな。うわ、キザなやつちや思うて、そいつの下の名前に唯一読めるアルファベットがあったからそれを取って、エッチって綽名付けたった」

「なんやそのやらしい綽名は。だいたいなんでエッチだけ読めるねん」

「鉛筆のお尻に書いてあるやん。エッチとビーはわかるて」

おばちゃんの前に黒い平皿が出された。が、おばちゃんは皿の上の料理を睨んだだけで箸を取ろうとはせず、また語り始めた。

「考えてみたら、あのひ弱な外見が相手を油断させる作戦やったんや。授業が始まってすぐにあたしはそれを痛感した。……、勝たれへんかってん。足し算カードでも、書き取りでも、タッチの差でエッチの方が早う終わりよるねん。おまけにヤらしい標準語が妙にウケて、いきなりクラス委員の座を奪われてしもた」

「いや、気持ちはわからんでもないけどな」

「わかるかいな。いきなり副委員長に格下げになったあたしのみじめな気持ち。言うてみたら聞いたこともない対抗馬がいきなり現れて総裁選に負けて小泉さんが官房長官にならされるみたいなものやで」

譬えが無茶苦茶でツツコミようがない。

「人生初めての挫折やった。あの悔しさをバネにあたしは五十年近く生きてきたんや」

五十年間それを持續していることの方が凄い。おばちゃんの背中には五十年分の凄まじい気迫が籠もっているように見えた。

「そして運命のあの日がやってきた。二学期いうたら運動会の季節やろ。その日の体育の時間はクラス対抗リレーの選手を決める大事な大事なレースやってん。正直、あたしは自信があった。多少勉強ができたかて、東京弁喋れたかて、運動では下町のワイルドな環境で育ったかず子ちゃんの敵やない」

「かず子ちゃんって？」

「知らんかったか？あたしの名前かず子やで。平仮名のかずに子供の子。うちのお好み焼きの店『かずちゃん』いうやん」

「いや、噂には聞くねんけど誰もその店を見た者がおらへん言う都市伝説が囁かれててやな……」

「こわっ、もしかして店の裏に古い井戸があって髪の毛の長い女の人の骸骨が埋まっていたりして」

「戦後すぐはこの辺も天然痘が流行ってたらしいし……」

「こら、リレーの話聞かんかい。あたしの実力からして選手に選ばれるんは間違いない。問題はアンカーになれるかどうかやった。アンカーは文字通りクラスのエースやからな。今までの学習効果でエッチがひよろひよろの見せ掛けであたしを油断させる可能性は充分ある。危機感を感じたあたしは一カ月間早朝の走り込みをやってその日に備えた」

一年生の徒競走の話がインターハイのスケールに聞こえる。

「最初、五、六人づつ走って上位を絞って行って代表六人はすぐに決まった。あたしはもちろん残ったけどエツチのやつもちゃっかり残りよった。その六人で同時に走って一番になったんをアンカーにしよいう話になったんやけど、残り四人をぶっ千切ったあたしにピッタリくっついてエツチが同着しよってん。男子の方が人数多いしアンカーはエツチでええんちゃうかて言う先生にあたしは噛み付いたで。一対一で決着付けるんが筋やて。スタートラインに並んだ時、エツチのやつが妙におどおどした目でこつちを見て来よるからグツと睨み返してやった。さっきの同着の悔しさで、あたしちよつと涙ぐんどったんかもしれん。クラス全員が見守る中で先生の笛が鳴った。地面からふわって浮く感じがしてな。めっちゃ体が軽いねん。イケる思うて夢中で手足を振ったがな。ところがエツチのやつ背が高い分コンパスが長かった。半分過ぎたところで、あいつはあたしに背中を見せとった。負けた——て、思うたな。それがゴール直前であいつの手の振りが急に遅うなって、あつと思うたらあたしはあいつを抜いてゴールを踏んどった」

「よかったやん」

「ええことあるかい。手抜きされたんや。涙ぐんでたん見て同情しよったんや。あたし、ゴールに座り込んで号泣したで。ヘタレなクラスの連中は嬉し泣きと勘違いしよるし、エツチは場違いなわけわからん笑顔を見せよるし、怒りの持

って行き場がないやん。そやから、そのままエッチに飛び掛かってポッコポコにしたった。目に青タン拵こぎえて鼻血流しよったから、ま、今日はこの辺で勘弁したろ言うて手離れたってんけどな。ひいひい言うて泣いとったわ」

「むちやくちやしよるな」

「おばちゃん、めっちゃ格好良えわ」

バリキとしのぶで微妙に感想が違う。

「結局、あたしはアンカーを辞退した。お情けでアンカーもろて嬉しいはずないやん。青タン顔でみんなの同情集めたエッチがアンカーに選ばれてん。それがまた腹立つことに運動会の本番ではあいつ三人抜きの大活躍で優勝しよった。あたし、残りの競技放ったらかして学校飛び出した。そのまま家の二階で夜まで泣き伏しとったわ」

なかなか壮絶である。

「ま、スポーツマンはそれくらいハングリー精神旺盛でなかったらあかんとは思うねんけどな。それのどこが……」

すっかりおばちゃんペースにハマって素朴な疑問を投げかけようとするバリキをおばちゃんは目で黙らせた。

「あたしはしつこい人間やない。済んだことは水に流す主義や」
「何の話や？」

「そやから、音楽会の練習で大太鼓の取り合いになった時にバチでどついて失神させたんも、ドッチボールの時にあいつの軸足ばかり狙って立てんくらいに青痣作ったったんも、馬跳びで思いつきり背中どやしてクラッシュさせたんも、リレーとは別の話や」

どっちにしる良い迷惑である。

「せやのにあいつ何考えてたんか、あたしのこと付け回すようになってん。もう十一月に入ってたかな。町のあっちこっちでしよつちゆうエツチと出喰わすようになってん。あからさまに尾行されてるわけやないねんけど、駄菓子屋に入ったらそこにおったとか、神社で遊んどって境内出てきたら杉の木の根方で本読んどったとか、ともかくわざとらしいねん。あたしと目が合うと何か言いたそうにじいってこつち見るねんけど、結局何も言わんと目を逸らしてどっかに行ってしまうよる。気色悪かったでえ。喧嘩売られるの待ち構えてたのに肩透かしばかりやもん。けど、まさか女子のあたしから果たし状叩きつけるわけにいかんしなあ」

おばちゃんの嘆きにも客達は無言だった。ツッコミようがない。

「二学期の終業式の日、『うちの事情で元の学校に戻られることになりました』って先生に紹介された時は心の中でガッツポーズやった。でっかいお年玉もらえたみたいなき分や。通信簿もろて、机ん中片付けて、さて教室出ましょ

ういう時にエッチのやつが声掛けてきよった。校舎裏の花壇のところで待ってるから来てくれ言うねん。よっしゃあつて思うたな。御礼参りや。腕が鳴るがな。どないやつて返り討ちにしたる思いながらあたしは花壇に急いだ。感心なことにエッチは一人で待っていて個人戦（アイマ）の舞台はでき上がっていた。ただ、あいつ手を後ろに組んどったから、あたしはちよつと用心せなあかんかった。何ぞ武器（えも）を持つとるいう感じや」

一年生同士の喧嘩の話に聞こえない。

「大太鼓のバチか、縄跳びの縄か、リーチによって間合い変えなあかんからな。あたしはゆっくりとエッチに近付いて行った。あと二、三步で間合いに入る、そう思うた時や。あいついきなり手を前に回して手に持つとったブツをぬうつてあたしの方に突き出しよってん。充分身構えてたから跳び下がって攻撃をかわすんはわけなかった。けどあいつが手に持つとったんはバチでも縄でもなくて、でっかい真つ赤なバラの花束やったんや」

脳裏に映像を再生するようにおぼちゃん（おぼちゃん）は固く目を瞑り、救いを求めるように天井を仰いだ。

「そのでっかい花束差し出してエッチのやつなんて言うたと思う？」

そのシチュエーションでKILL YOU！はないだろう。

「『大きくなったら僕のお嫁さんになって下さい』やて」

せいぜい口を窄めると舌つ足らずな裏声でおばちゃんは告白シーンを再現した。おばちゃんが何と返事をしたかは充分に予想がついたがそれでも客達は固唾を呑んでおばちゃんの口元を見詰めた。

「あたし言うたってん。『あほちゃう？』」

予想を遥に上回っている。

「たった、その一言だけ？」

「いやいや、あたしもそこまで不親切やないて。どんな相手にでも誠意は見せなあかんと思うてる。そやから分かり易く説明したった。『あたしはひ弱なやつは嫌いや。あたしより喧嘩弱いやつは嫌いや。あたしより足し算カード速いやつも、書き取り速いやつも、足速いやつも大嫌いや』ってな」
単なる恨み言である。

「『もう一つ言うたら親の金でバラなんぞ買うて格好つけたがるやつは一番嫌いや。男やったら自分の技で勝負せんかい。ギター弾いて歌でも歌うてくれたら考えたるわ』っていうてん。これはちよつと意地が悪かったと反省しとる。あたしもエツチもめつちや音痴で大太鼓の取り合いしたんやもん」

ふうと、おばちゃんは太い溜息をついて焼酎を煽った。

「エツチのやつ、ぶっ壊れたような顔しとったな。そらちつとは……、一億分の一くらいは気の毒かなて思うたで。けど悉くあたしを阻む天敵で、そのクセ

いっつも屈辱的な同情の目で人を見よって、頭の天辺から足の先まで都会っ子丸出しファッションで、おまけに巨人ファンの男にどないせい言うねん。何億光年経ったって結婚相手にするわけないやん」
皆が『光年』はおかしい——と思っただが他にもツッコミ処が満載で口が開かない。

「言うだけ言うたらすつきりしたから、後も見んとさっさと帰ったわ」

「それで？」

主人が代表質問する。

「それでって？」

「それで、そのエッチとはその後どうなったん？」

「どないもならへんよ。その日を最後に二度と会うてへんし。ま、死ぬまで会うこともないやろな」

ケロツと言っておぼちゃんは焼酎を飲み干した。

「いやあ、ええラブロマンス聴かせてもろたわ。何ぞちやう話しようか」

バリキは首の凝りをほぐすように音を立てて骨を鳴らすとしきりに肩を揉んだ。

「ちよ、ちよっと何言うてるのん。今のは前振り。あたしの小学校の時のトラウマの話やんか。ラブロマンスはこれからやで」

「いや、前振りだけでも下手なスプラッタ映画より充分恐かった。これ以上聴かされて心臓マヒ起こしたらかなわん」

「えーっ、あたしラブロマンス聴きたいですう」
しのぶが抗議の声を上げる。

「どうでも良えけど折角の揚げ物もんがだいぶ冷めたで」

主人に言われておぼちゃんはようやく自分の注文がとうの昔に出されていたことを思い出した。

「ちよつと待つとり」

主人は皿を取り上げて中身をフライヤに戻すと軽く温め直してくれた。改めておぼちゃんの前に少し濃いめのキツネ色になった揚げ物が出される。

「これ何？揚げ餃子？」

「それに近いな。インドのサモサイいう料理風に作ってみてん。餡は潰したジャガイモをベースに鶏のミンチと野菜の微塵切りを混ぜたもんや」

「戴きますう」

おぼちゃんはおちよぼ口になって一つ目を半分ほど齧り取った。

「うお、へっほう、はらい」

「何言うてるかわからへんで」

「結構、辛い言うてん。でも、系統のちやう辛さやな。これはカレー系の香辛

料や」

自分も飲食店の主人のおばちゃんはレシピを探るように口の中で何度も噛みしめる。

「あら、なんぞ甘い粒が入ってるやん」

「レーズンや。アクセントになるやろ」

納得顔で頷くとおばちゃんは四杯目の焼酎をリクエストした。

「で、いよいよあたしのラブストーリーや」

「おっちゃん、耳栓ないか？」

バリキが泣きそうな声を出した。

「ま、今日は諦めてこれでも食べとり」

「お、ご飯もんで雑炊かいな。この真ん中の赤いのは何？」

蓮華でかき混ぜながらバリキは主人に訊いた。

「チャンジャ言うて魚の内蔵のキムチやな。程よい辛さやと思うで」

「なんやお酒が欲しうなってくる味やな。おっちゃん熱燗ちようだい」

「ほいよ」

オーダーを受けながら主人はしのぶに黒い深鉢を出した。

「小鯨の南蛮漬けや」

鉢の中にはキツネ色に上がった魚の姿揚げが漬け汁に浸っている。たっぷり

と盛られた細切りの玉ねぎと人参の彩りが楽しい。ところどころに浮いている赤い鷹の爪を見ていると口に入れる前から唾が湧いてきそうだ。

「エッチのおかげで、あたしは小学校の頃は恋愛恐怖症になっとなった」いきなりおばちゃんは語り始めた。

「男子に勉強で勝っても、運動で勝っても、喧嘩で勝っても、気の休まるヒマがなかった。いつ何時、校舎裏の花壇に呼び出されてバラを突き付けられるかわからんやん。普通にクラスの男子と喋っつつても、もしかしたらこいつ今背中にバラを隠し持ってるかもしれないとか、ポケットから指輪出してきたらどないしよとか気になって、常時奇襲攻撃に備えなあかん異常体質になっつてしもてん」

「確かに異常体質やな。恋愛を怖がる理由が普通やない」

「中学に上がった時もこの哀しい体質をずっと引きずってて、あたしは『純愛』とも『青春』とも無縁の一生を送るんちゃうやろかと暗い気持ちになっつてん」四杯目の焼酎に口を付けながらおばちゃんはまた、ドスの利いた含み笑いを始めた。

「勘弁してえな」

バリキの泣き声をよそにおばちゃんは体を揺すって回想モードに突入していく。

「白馬の王子様が転校して来たんは一年の時。二学期の始業式やった。その人、一見してスポーツか武道で鍛えたんが分かるがっちりした体格でな。精悍なマスク、すらっとした背丈、ちよつと不良っぽい三白眼をうっすらと細めててそれがまたストイックな感じで良えねん。耕作ちゃんはまさにあたしのストライクゾーンど真ん中やった。しかもあたしが一心に祈ってたらなんとその人、あたしの隣の席になりよつてん」

「うわあ、そういう想いつてやっぱり通じるもんなんですねえ」

しのぶが無根拠な感動の声を上げる。

「机の間を通過してあたしの席に近付いてきた時はもう心臓バクバクもんや。あたしのすぐ傍に立たはった時にそおつと見上げたらバチイって目が合つてしもてな。その瞬間世界がストップモーションになったで」

バリキの脳裏に番長同士の目がぶつかって火花が飛び散るシーンがよぎつた。

「で、ちよつとおどおどした声作つてな『こんにちは』って言うたら『うっす』ってぶつきらぼうなん。けどその言い方に気安さいうか温か味が籠もつてんねんな。初っ端から馴れ馴れしい奴や思われとうなかつたけど、やっぱり気になるやん。先生の方を気にしながら通路越しに小声で質問したんが二人の初めての会話。『どこ住んでんの?』とか『兄弟は?』とか『好きな食べ物は?』と

か」

四十年後にしのぶにした質問と大差がない。

『北野』とか『一人っ子』とか『いや和食はちよつと中華の方が良え』とか必要最低限の言葉でぶっきらぼうに答える感じがまた良えねん。で、答える度につまらんこと言うてもたって感じでいちいちそっぽ向くねんな。シビレるやろ」

目が遠くにタイムスリップしている。

「一目惚れしたあたしの目に狂いはなかった。耕作ちゃん、見た目威圧感あるだけやなくてバリバリのカリスマやった。面倒見は良えし弱い者いじめは絶対せえへんし、正義感が強いから間違ってる思うたら相手が校長でも喰って掛かっていきよった。たちまちクラスの人気者や。耕作ちゃんがクラス委員、あたしが副委員になった時どれだけ嬉しかったか。けど、不安も大きかった。多分、ライバルは多い。ここは慎重にことを進めんとあかん思うたな。ど真ん中の絶好球振り損ねて三振喰らうたりしたら泣くに泣かれへんやん。その頃のあたしな、背も百六十切るくらいで髪の毛はおさげにしてたから清純路線で攻めることにしてん。今のあたしからはセーラー服におさげって想像つかんかもしれんけど……」

不本意にもその巨大なパーマが視野に入って安易に想像してしまったバリ

キは「うっ」と呻いた。

「自己紹介するやろ。学校の中案内するやろ。授業の進み具合説明したり、ノート見せたげたりする内にな気付いたことがあってん。耕作ちゃんなあたしにだけ話し方が妙に気安いねん。そら面倒見の良えところはあつて誰とも分け隔てなく喋るねんけどな、他の子と喋る時はちよつと威圧感があるというか距離を置いた話し方になるねんな。それがあたしと喋る時だけは砕けてるというか、氣遣うてもろてるいうか、とにかく優しいんや」

サモサが一つ口に消え焼酎が一口煽られる。

「あたし思うたな。『こいつはあたしに気がある』つて。それでもあたしは焦つてドジ踏みたくなかったから、ひたすら慎重に事を進めたで。クラス委員の立場を利用して休み時間も放課後もできるだけ一緒に時間作るようにして、下校も一緒に登校も最初は待ち伏せしててんけど途中から迎えに行くようになってたりしてな。で、機は熟したと睨んだところで、お休みの日のデートをねだつてん」

「積極派やつたんですねえ。格好良えわ」

「つて、中一の話やろ。その時代、そんなもん周りが許さへんかったんちゃうん」

「あんたは風紀委員か。だいたいそれは誤った歴史観やで。十代で青春したい

いう気持ちに時代は関係ないやん。どの時代でもちゃんと青春はあります。そら不純異性交遊がどうか、処女性がどうか、嫁入り前の娘がどうか、婚前交渉がどうかやかましく言う大人はたぶん今より多かったと思うけど」

「って、どこまでいってるねん。中一で」

「あほ、物の譬えや。今も昔も同じこっちゃ。要はバレさえせんかったら何の問題もない」

「そういうもんかあ？」

「ええ大人が何言うてるのん。十代の子供がそういうことに巧妙なんは昔っからやろが。それに時代は東京五輪の前の年やで。吉永小百合が『いつでも夢を』に出てて、御三家がおって、『こんには赤ちゃん』が第二次ベビーブームを煽った時代やで」

最後のフレーズが引つかかる。

「世を挙げて青春しなさいて政府が推薦してるのにデートせんてどないする。……、でな。耕作ちゃんにさりげなく『映画とか観に行きたいな』と仄めかしたら、『今度の日曜に連れてったるか』言うてくれてん」

間違いなく『さりげなく』ではなく『露骨に』だったとバリキは確信したが黙っていた。

「二年に上がる頃には学校でも公認の仲。進路も同じ高校目指そうて、毎日一

緒に勉強してたなあ。耕作ちゃん理科と社会は得意やったけど、国、英、数があかんかったから教え甲斐があったわ。本番の入試では数学も国語も奇跡の如くヤマが当たった言うてたけど、それでも英語だけはどっしりもなかつた」

おぼちゃんの思い出し笑いはやはり野太い。

「スポーツ万能で空手と合気道やってたから喧嘩も滅法強かったけど、走るんはイマイチやったな。『東洋の魔女』目指してたバレエ部におつたからかもしれんけど、あたしの方がタイム良えくらいやったもん」

おぼちゃんの身長がここまで伸びた理由が垣間見えた気がした。

「中学の卒業式の後であたし、耕作ちゃんに校舎の裏の花壇に呼び出されてん」

「そのシチュエーションに不安はなかったんかいな」

「何言うてるのん。トラウマと一緒にせんといて。期待に胸膨らませて行つたわ。耕作ちゃん見慣れんギター抱えててな。『黙って聴いてくれ』いうてボブ・ディランの風に吹かれてを歌ってくれてん。ロマンチックやろ」

しかし、その曲の歌詞は恋愛とは無関係である。

「歌い終わってな。『二十歳になったら一緒になれへんか』つて言うてくれてん。あたしはもちろん二つ返事や」

「すっごお、ぶっ千切りのラブロマンスですよん。格好ええなあ。羨ましいなあ。あたしもあやかりたいわ」

「どうでも良えけど、それただの惚気話やん。苦難と障壁はどないなってん」
言ってからバリキは慌てて口を噤んだ。

「心配せんでも今から話したるがな。結局なあたしが二十歳になった時に結婚したんは別の人やったの」

「ええっ、なんでですのん？」

「いや正確に言うとな結婚させられてしもてん。高校上がってすぐのことやった。うちの実家は日本料理屋やったって言うたやろ。あたしのお婆ちゃん——お父ちゃんのお母ちゃんはその大女将に収まってはってん。店一番の権力者でお父ちゃんも頭が上がりん存在や。ある日、あたしが学校から帰ってきたらその大女将に呼ばれてな一枚のスナップ写真見せられてん。何や知らんけど見たことないぼうとした顔の男の人が背広着て写とった。あたしにその写真見せてな、お婆ちゃんが言わはってん。『その人でよろしいな』って。それでしまいやった」

「何がしまいやねん？」

「だから見合いが済んだちゆうこつちや。うちではお婆ちゃんがこうや言うたらそれは決定事項やねん。せやから、その一瞬であたしはそのよう知らん人と結婚することになって耕作ちゃんとは結婚できへんようになったいうこつちや」

口をへの字に曲げておばちゃんはしょぼんと肩を落として言った。

「無茶苦茶やな。その話、百年くらいタイムスリップしてへんか」

「するかい。昭和四十年代の話や。ついでに言うとな、そないな話、二十一世紀の今でも行くところ行ったらごろごろしてるで」

「ひっどお」

しのぶがカウンターを力任せに叩いた。危うく南蛮漬けの鉢が引っくり返りそうになる。

「そないな話ありませんよ。本人の意思と希望はどないなるんですか。何様のつもりなんやその人。そんなん、お、おばちゃんも、耕作ちゃんも、か、可哀相過ぎますう……」

語尾が震えて声にならず、しのぶは子供みたいにしゃくり上げ出した。隣のおばちゃんがそつと優しく肩を抱く。

「あんたホンマに良え娘やな。なあ、そない泣かんといて。もう済んだ話やねんから。おばちゃんまで哀しくなってくるやん」

おばちゃんはぎゅっとしのぶの肩を抱きしめる。しのぶはおばちゃんの巨大な胸に顔を埋めて泣きじゃくり続けた。感動的な場面のはずなのだが、だらしなく緩んでいるおばちゃんの口元がバリキには気になった。と、いきなり万力のような抱擁から身を振ってしのぶが顔を上げた。真っ赤に泣きはらした目で

きっかりとおばちゃんを目を見据えると機関銃のようにまくし立てる。

「今からでも遅くないです。抗議しに行きましょう。ね、やってみるとわかりませんやん。それであかんかったら耕作ちゃんどこに行つて連れて逃げて頼むんです。こうなったら駆け落ちしかありません。大丈夫、あたし成功例を知つてますからアドバイスできます。うちの両親も駆け落ちしたんです。ちゃんと逃げるテクニク教えますから。ね、善は急げですて」

突然の告白に今度はおばちゃんがたじろぐ。

「いや、あのな」

「おばちゃんかて今でも耕作ちゃんのこと愛してはるんでしょ」

「そら、そうやねんけどな」

「だったら何をぐずぐずしてはるんです」

しのぶは決然と立ち上るとおばちゃんの巨体を引っ張り上げようとした。

「ん？ちよつと待って。おばちゃん確か、『大恋愛の末に苦難と障壁を乗り越えて結婚した』って言わんかったか？」

バリキが記憶の糸を手繰る。

「言うたで」

「言うことは、おばちゃんの今の旦那って耕作ちゃんなんちゃうん？」

「そうやで」

ケロツと言つてのけるおばちゃんに、バリキの肩は一気に下がった。呆然とした顔でしのぶが丸椅子にへたり込む。

「そやかならなあ、しのぶちゃんの気持ちはありがたいけど今更駆け落ちを勧められてもなあ。もう結婚してるしどないしよかなって」

「そういう問題かい」

「しのぶちゃんもむっちゃ良え娘やねんけど、ちよつとそそっかしいわな。話は最後まで聞かなあかんで」

さつきまでの感動の場面を綺麗さっぱりリセットして、おばちゃんはしれつと言つた。その泰然と物に動じない態度は、おばちゃんの大物ぶりと年輪を感じさせる。

「どこまで話したっけ？ ああ、そうや。で、写真見せられたあたしはパニックってその足で耕作ちゃんとこに駆け込んでん。話聞かせたら耕作ちゃん激怒したってな。お父ちゃんに直談判したる言うてくれてん。男やなあって感動したで。けど何勘違いしたんか、高校生が素で行つても貫祿負けするやろ言うて蔵の中に入って行かはってん。耕作ちゃんのご実家、もの凄いい金持ちやねんで。蔵はあるわ、門番はおるわ、つていうような家やねん。で、耕作ちゃん、蔵から甲冑と刀剣引っ張り出して来てそれで武装して家に来てくれてん」

「なんじゃそら」

「いや耕作ちゃんのお父さん骨董が趣味で」

「誰もそないなこと聞いとらへん」

「でも格好良いですう。愛する人のために甲冑着てくれるやなんて」
しのぶが再び感動に目を潤ませる。

「いうか街中で捕まるやろ、普通」

「みなと祭り近かったしな。パレードの練習と間違えられたらしい」
夫婦揃ってただ者ではない。

「で、どないなったん」

「いや、その格好やとやっぱり家入る時の挨拶は『頼もう』やわな。で、耕作ちゃんも料理屋の勝手口から入って——あつ、客商売に気い遣うてくれて正面から入らんとこが礼儀正しいやろ」

いずれにしても迷惑な話である。

「『頼もう』て言うた途端、包丁研ぎに出て来たお父ちゃんと出喰わしよってん。お父ちゃんおつちよこちよいなとこあるからな。いきなりパニックってしても」

軒先に鎧武者が立っていたらパニックにならない方がおかしい。

「いきなり菜切り包丁振り上げて追い駆け回してん。耕作ちゃんは身の危険感じて回れ右して逃げ出してんけど、甲冑慣れしてへんし、それにあれむっちゃ

重たいらしいな。前はよう見えへんしで、あっちにふらふら、こっちにふらふら、よろめきながら往来逃げて行きよった。あれは情けなかったなあ。酔っぱらった鎧武者が割烹着着たおっさんに追い回されてるみたいで」

「つくづく、よう捕まらんかったもんや」
「いや、みなと祭り近かったし」

そんな趣向のパレードは普通ない。

「まあ、作戦の第一弾はあまりにも無計画やったんで頓挫した」

「まだ、他にも何かやったんかいな」

「当然やん。どっかから右翼の街宣車を調達して来てアジ演説やったで。しかも実家と婚約者の屋敷と両方で」

単なる嫌がらせにしかなくてない。

「それから、耕作ちゃんな勤労学生であの頃休みの日は毎週工事現場で働いてん。神戸駅あたりで朝立っとならダンプのおっちゃんか拾ってってくれるらしいねん。で、一日働いてなんぼで日銭もらうねん。そやから工事の仕事仲間はぎょうさんおったんよ。ダンプで婚約者の屋敷に突っ込む計画を立てたらしいねんけど、誰も運転してくれて名乗り上げてくれんかったらしい。根性なしやな」

名乗りを上げていたら刑務所行きである。

「で、だんだんと切羽詰まってきたし、背に腹は変えられへん言うことで、耕作ちゃんのお父さんに二人で頭下げて中に入れてもらおうようお願いしてん」

「なんか、ようやくまともな案やな」

「ところが、お婆ちゃんはけんもほろろやった。家の格でも財産でも耕作ちゃんのご実家はひけ取らへんかってんけど、『自分の決め事を誰ぞに覆される』いう文字はお婆ちゃんの辞書になかったからなあ」

言ってお婆ちゃんは焼酎を煽った。

「しまいには耕作ちゃんのお父さんの方がキレてしもて、息子にはもつとマシな嫁を取るいうて席蹴ってしもてん。逆効果もええところや。あ、それからもちろん駆け落ちもやったで」

それを聞いてしのぶが目を輝かす。

「『もちろん』なんかい」

「基本やん。けど、お婆ちゃんとあたしではレベルが違い過ぎるわな。悉く手の内読まれてて町内脱出する前に連れ戻されてしもた。元々、うちは女系ちゅうか女性のパワーがあり余ってる家系やねん。しかも時代を遡るほどやることゝが凄まじくてな。お婆ちゃんに比べたらあたしなんか純情可憐を絵に描いたよ
うな箱入り娘やった」

「そのお婆ちゃん、人間か？」

「それからな」

「まだあるんかい」

「耕作ちゃん、婚約者に果たし状叩きつけて決闘申しこんでんけどなあ。会うてみたら、どっししようもないひ弱そうな男で話にならん。決闘を実行しとつたら、ただの傷害罪か殺人未遂で鑑別所行きは目に見えとつたから諦めざるを得なかつた」

目の前のグラスを見て自分が居酒屋にいることを思い出したみたいにおばちゃんはまだ焼酎を煽った。

「あんまりしつこうに、あれやこれややったもんやから、お婆ちゃんもお父ちゃんもキレてしもてな。とうとう家に閉じ込められてしもてん。まあそうなたらただの高校生やもん。手も足も出んわな。耕作ちゃんとは連絡が取れんようになるし、あつと言う間に時間ばかり過ぎて二十歳になった年にそのお見合いの相手と結婚させられたちゆうわけや。それに耕作ちゃんもあたしの結婚のすぐ後に誰ぞと結婚したって高校の友達から教わったわ。ヤケ起こしてないと良えけどって心配したなあ」

「ひっどお。やっぱりひどいです」

「ありがと。けど、長いこと生きとつたらどうもならん時は何度かであるもんやで。大事なんはそこからどうやって取り戻すかや」

「どないやって取り返してん？」

「あたしは何もしてへんで。いや、ほんまは毒でも盛ったろかな思うててんけどその必要なかってん。あたしと結婚した人な半年もせんうちに結核で亡くなつてしまひよつた」

「なんじゃそら。むつちや素朴な疑問なんやけど半年で亡くなつたちゆうことは結婚した時点で結核やつたんちゃうん？」

「たぶんそうやろ」

「よう誰も反対せんかったな」

「いけいけどんどのUターン禁止みたいな一家やったからな」

「恐すぎるで、おばちゃんどこ」

「あたしが未亡人になつたつて聞きつけた途端、耕作ちゃんも反撃に出よつてん」

「どないしたんや」

「愛人を作つた」

しれつと言つておばちゃんは焼酎を飲み干す。グラスを振つて五杯目をリクエストする。

「一切、家に帰らんようになつた。耕作ちゃんの実家にお嫁さんがおれんようにしてしもて、離縁に持ち込んで独身に復帰しよつた」

「洒落にならん話やな。本人同士で話し合うとかもつと穩便に進めようとするやろ」

「わかつとらんなあ。時代背景はバリバリの昭和やで。しかも耕作ちゃんの家は格式高い旧家、お嫁さんもそれなりの家の出や。結婚も離婚も本人同士の気持ちや思惑でどうこうできるわけないやん。くつつくんも別れるんも決定権持つてるんは家ちゆう大きな仕掛けの方や。あたしは相手がどんな人やったかなんて全然知らんし知りとうもないけど、耕作ちゃんにしたって気持ちの良えやり方やったはずないやん。苦渋の選択やったと思うわ」

「しっかし、二十歳そこそこやろ。つくづく過激過ぎるで。よう真似せんわ」

「あたしらやからできたにきまつてるやん」

「その耕作ちゃんの前の奥さんそれからどうしはったんですか？」

「知らん。知りとうもないし」

「けど、めっちゃ可哀そう。何も悪いことしてないのに」

今度はしのぶが離縁された女性に同情して涙ぐむ。ふいに、おばちゃん目が不穩に細められてきっかりとしのぶの顔を見据えた。

「あのな、しのぶちゃん。それは優しいとか人が良えのとはちゃうで。その人の残りの人生知ってどないするん？一生、後ろめたい思い引きずって生きていくか？こないなことなら自分が身を引いたら良かったって後悔するか？人間、

幸せになりたいと思うたら意地でも忘れなあかんこともあるし、目瞑らなあかんことかて仰山ある。真剣に幸せになりたいと思うんやったら、後ろを振り返ったらあかんし、余計なことは何一つ考えたらあかんねん。それが残った者の義務や」

おばちゃんは太い息を吐いて軽く首を振るとにんまりと笑った。

「人生は短いねん。楽しんで生きな嘘やんか。でな、晴れて独身同士に戻ったしこれでバラ色の人生が始まるて、あたしは思うてた」

「じゃあすぐに耕作ちゃんと結婚しはったんですね。ええなあ。羨ましいなあ」
現金なものでしのぶは又目を潤ませる。

「いや、思うてもみてへんかった伏兵がおった。そう簡単には結婚に至らんかってん」

「何ですのん？伏兵て」

「耕作ちゃんや」

思いつくのも腹立たしいといった形相でおばちゃんは吐き出すように言う。

「ああもう、男つてなんであないに愚図いんやろな。二人とももうええ大人や。一応一通りの結婚も経験してたし周りもやかまし言わんようになってた。耕作ちゃんは日曜の度にデートに誘うてくれはった。けど、それだけやねん」

「それだけ？」

「プロポーズがないねん。いつ会ってもぐずぐず、ぐずぐず、って何か言いたそうにしてるだけでな水向けても話はぐらかしよる。こっちはおさげの中学生ちやうねんで。あの鎧武者の勢いはどこ行ったんやてキレて帰ったこともある」

「ひっどお。おばちゃんそれだけ待ってはったのに」

「そやろ。最初の一、二カ月はまだ初々しいし、暫く恋人気分を味わうのも良えなあて思うてたで、それが半年経ち、一年経ち、二年、三年、五年……」

「ながっ」

「不安通り越して絶望的な気分や。よっぽど絶縁状叩きつけたろかいなと思うた」

それは結婚しないと叩きつけられない。

「要は二人を引き裂く運命があったから盛り上がっててん。いきなり、あとは勝手に言われてもなあて気分やな」

「典型的な長過ぎた春パターンやな」

「聞いた風なこと言うてるんやないで。けどその通りやろな。そのうち結婚を切り出すのも難しくなってくる。毎週デートして、時々お泊まりしたりしてもう半分結婚してるみたいなのもんやったもん。さすがに五年目には耕作ちゃんも焦りだしたみたいやった。なんぞ一発凝ったプロポーズかましたろいう雰囲気

が漂ってきたわ」

「うわぁ、いよいよですね」

「それがまたへたれな話ばかりやねん。夜中に電話で呼ばれて様子がおかしいから駆けつけたらベロベロに酔うてたりな。酔った勢いで告白する腹やったらしいけど朝まで介抱させられただけや。逆に朝早うに叩き起こされて伊丹空港まで来てくれ言うから慌てて行ったら血走った目付きで立ってたりしてな。あたし、柱の陰から観察しながら『あかん心中する気や』と察して逃げて帰ったわ。巻き添え喰ったらかなわんもん」

シビアである。

「結局、伊丹で何しはるつもりやったん？」

「千歳まで連れて行って、結婚してくれんかったら帰らんとて駄々捏ねるつもりやったらしい」

「わかりにくっ」

「性懲りもなく街宣車調達してきよったけど町内に入る前になんとか食い止めた。何が悲しうて町内の伝説に残るようなプロポーズ受けなあかんねん」

「いや、一生の思い出にはなるやろ」

「あのなあ、あたしはロマンチックが好きやねん。プロポーズの言葉はしっかりと秘めやかに囁いてほしいねん。そう仄めかしたらやっとな分かってくれたみたいで週末に金星台で待ってるて言うてくれてん」

気を持たせるようにおばちゃんは焼酎を一口煽った。

「約束の時間は七時やってんけどな、事故渋滞でバスが遅れて着いたら七時半回っててん。耕作ちゃんの足元見たらいっぱい吸殻が散らばってて焦ったな。耕作ちゃん、気い短いし、顔見たらもう我慢の限界みたいな顔してたし、ここは言い訳しても始まんから取り敢えず謝っとこかて口を開き掛けた時や。いきなりでかい声で『この大事な日にいったい何分待たせる気や』て怒鳴りつけられてん。瞬間、頭ん中がプチンってキレてしもたわ」

おばちゃん、勢いに任せて焼酎を飲み干す。

「あたしが何年待ったと思うてるん」

ドスの利いたアルトが酔鏡に響いた。抑揚のない口調が聞くものを震え上がらせる。

「たぶん三分以上、耕作ちゃんはフリーズしてたと思うで。その後、ようやく意識を取り戻してちゃんとプロポーズしてくれた」

「何て言うてもろたんですか？」

「『結婚して下さい』って」

おばちゃんは言いながら体をくねらせて恥じらった。象あざらしのダンスを見るような目付きでそれを見ながら、バリキが諦観とも安堵とも知れぬ溜息を吐いた。

「それから元町でうんと呑んで、酔った勢いで第五管区の海上保安庁の係留施設にこっそり入って、ポートタワー見ながら思い出の風に吹かれてを二人で歌うてん。あそこ、人が来うへんし穴場のデートスポットやで」

来ないのではなく侵入しないのだとバリキはツッコミたかったが、あまりにもおばちゃんが幸せそうなので黙っておいた。その夜、艦艇の浮かぶ港は時ならぬ外国の反戦歌でたいそう賑やかだったことだろう。

「よかったですう。ほんとに二人がハッピーエンドになって。あたしめっちゃ嬉しい」

目を潤ませながら、胸の前で手を組む。

「今でもお二人はラブラブなんでしょ。夫婦喧嘩とかしはらへんのんちやいますか」

「夫婦喧嘩なんかしよっちゆうやで。ま、それは仲の良え証拠みたいなものやから」

おばちゃんとしのぶは「いややあ」とか言いながら親子のあざらしよろしく身をくねらせる。

「けどな」

急におばちゃんの顔が真顔になった。

「どうしても許せんことが二つあるねん。一つはそのボブ・デイランや。結婚

してから耕作ちゃんに風に吹かれて歌ってえなあって、なんべんもリクエストしてるのに、絶対歌うてくれへんねん。『そんな曲知らん』の一点張りや。別に中学の時みたいにギターの生演奏でなくても良えねんで。カラオケでもアカペラでも良えから言うてるねんけど、その話したら『知らん』言うねん。あたしにとつては思い出の大事な曲やのに、耕作ちゃんにとつてはどうしても良えんかなと思うたら、めっちゃ淋しい」

「ひっどお。おばちゃん今から抗議の電話しましょ」

しのぶがおばちゃんの丸太のような腕に縋りつく。

「いや、許せん言うてもこれはあたしがちよこつと我慢すれば済む話やし。問題はどう一つの方や。最近、耕作ちゃんの浮気が発覚してん」

「ええっ」

驚愕の色が走ったしのぶの顔は一気に怒りで真っ赤になる。

「何ですかそれ。最低やん。おばちゃん、そんな男とはすぐ別れた方が良えですよ。あ、警察にはちゃんと通報しましたか？」

「そやろ。ひどい話やろ。あたしも、すぐ警察に通報しよ思うてんけど何課にかけたら良えかわからんで困ってるどこやねん」

かけてこられたら警察が困るだろう。

「先週の金曜のことや。耕作ちゃん、えらい呑まはってな。会社の部下に送っ

てもらいよってん。あっ、耕作ちゃんて大手の運送会社で今は専務やねんで。こつちも部下の人ねまう労うてお茶の一杯も出すわな。そしたらその人、『今日は良え話聞かせてもらいました』言いよるねん。って、何が良え話やねん」

おばちゃんは肩を怒らす。

「『専務の初恋の話聞かしてもろたんですわ』ちゅうからてつきりあたしのこ
と惚気られたんや思うて、いややな、素面で耕作ちゃんがどんな話したか聴か
されたら恥ずかしいなって思いながらどないな話してましたって訊いてん」

「訊いたんかい」

「そしたらどうも様子が違う。『専務の初恋の人って、小学校一年生の同級生
や言うてはりました。今でもずっとその娘が俺の心の星やねん』って、こう言
わはるんよ。あたし目の前が真っ暗になったわ。あたしは中一の時に耕作ちゃ
んに一目惚れしてずっと耕作ちゃん一筋で来てんで。それがあたしの初恋や。
そやのに、耕作ちゃんのはちやつかりその何年も前に女作ってたやなんて。いけ
しやあしやあと、どこの馬の骨ともわからん女つかまえて、初恋の人や、心の
星やて今でも思うてるやなんて。部下の人がおらんかったらその場でいびきか
いて寝てる耕作ちゃんのアルマーニのネクタイ解いてそれで首絞めたるか思
うたもん」

「絞めないな」

「いや、耕作ちゃんアルマーニ好きやし」

「そうやなくて。そのどろが浮気やねん」

「ひっどお、あたし、おぼちゃんの気持ちよう分かります。一時の浮気心やつたら涙を呑んで堪えられるかもしれんけど、今でも関係が続いてるやなんて離婚調停もんやわ」

『続いてないて』というツツコミを入れる気力は体力が売りのバリキでもさすがに失せていた。

「しのぶちゃん、あんたほんまに良え娘やなあ。なあ、今日からうちの娘にならへん？あの浮気者放り出して二人で暮らそ」

おぼちゃんはしのぶのポニーテールを弄くり回しながらうつとりとした声を出す。傍で見ていたバリキがどこまで本気か危ぶむほどその手の動きには執着心が感じられた。

「けどなんやね。もうちよつと大人っぽくしても良えんちやうかな。あんたほとんど素っぴんやろ。折角こないに可愛いねんからもうちよつとおしやれせなな」

おぼちゃんは足元の紙袋を探ると目が眩むようなラメ入りの紫色の化粧ポーチを引っ張り出した。

「口紅くらいつけてやね。あらあ、綺麗な桜色やね。リップつけるんが勿体な

いくらいやわ」

おばちゃんの方力のような手に顔を固定されて声も出せず身動きも取れずしのぶは両手でもがいた。

「それにポニーテールも可愛いけどもう大人なんやからたまには髪の毛を下ろしてメガネもコンタクトにしてみたらどうやる。イメージ変わるよお」

バリキと主人が慌てて止めようとしたが間に合わなかった。おばちゃんはしのぶの項に手を伸ばすと桜色のリボンをシュツと音をさせて解き、太い指で小さな鼻の上のフレイムを摘むとメガネを外してしまった。

「へえ、結構髪長いんやねえ。でも、ちよつと鬱陶しそうやからわけてあげましょ」

今度は目の眩むような原色オレンジのブラシを取り出してしのぶの髪を左右に梳きにかかると。

「思った通りやわ。だいぶイメージが違つ……、え？えええっ」

仰け反るおばちゃんの前に二十歳の娘が姿を現した。度の強いメガネの奥に隠れていた大きな瞳は酒の酔いに手伝われて奥二重に変貌している。その瞳が焦点を合わせようとするとするように長い睫毛を添えてしきりに瞬かれる。長い髪は頬を掠めて軽くウェーブを巻きながら胸元に掛かり、白い丸顔にシルエツトを与えてすつきりとした細面に見せている。しなやかに伸びた背筋が一瞬にして

一段背丈を伸ばして見せた。

「あの」

とまどったような声で低めのソプラノが柔らかく響く。

「ちよっとお。イメージ変わり過ぎやで。あ、しのぶちゃん、さっきの一緒に暮らそういう話なしな。忘れて。あたし、十六歳以上の女の子には興味持たれへんねん」

だが、『ひっどお、幼児誘拐目的やったんですか？』といったボケは帰って来なかった。

「あの、少しよろしいでしょうか？」

「はいなんでしょ？ってなんで東京弁」

「おぼちゃん解禁してしまいいよったな。しのぶちゃんな、メガネとポニーテール外すと別人に変身するねん。何でか知らんけど」

「わたし、ついさつきまではこんなお話するつもりなかったんです。思い出に水を差すような気がして。でも、冗談めかしておっしゃってるけど、かず子さんがとても傷ついているのが分かるからやっぱりお話しします」

しのぶは気持ちを落ち着かせるように猪口を煽ってから言った。

「耕作さんの初恋のお相手なんですけど、わたしやっぱりかず子さんじゃないかなって思うんです」

「いやいや、かず子さんやてなんや照れるやん」

吉田のおぼちゃんは身をくねらせた。

「けど、そやかて小学校の同級生というてるんやで。あたしが耕作ちゃんに出逢ったのって中一の時やもん。話が合わへんやん」

「忘れてるだけで、かずさんは耕作さんに小学校の時に会われているんじゃないかなと思うんです。かずさん、わたしに教えてくれましたよね『幸せになりたいと思ったら意地でも忘れないといけないことがある』って。きつとかずさんは前を向いて歩くために嫌なことやつらいことを全部振り払いながら生きて来られたんだなと思いました」

「ま、済んだことは水に流す主義やからな」

「小学一年生の時の転校生のことも名前や顔を忘れておられるんじゃないでしょうか？」

「当然やん。一番思い出しようないことの一つや。エッチで綽名を忘れられへんだけでも屈辱やのに顔や名前を憶えとるわけない」

「わたし、耕作さんとの出会いのお話を伺ってあれれと思ったことがあるんです。かずさんの質問に耕作さんおかしな返事をされましたよね。『好きな食べ物は何？』って訊かれて、『いや、和食はちよつと』って。で、そのすぐ後につまらないことを言ってしまったと後悔するみたいにそっぽを向かれた」

「よう憶えてるなあ。確かにそう言うたけど」

「普通、好きな食べ物はって訊かれたら、ハンバーグとかきんぴらとか好きな物の名前を出しますよね。だのにどうしていきなり和食が苦手とおっしゃったのでしょうか」

「さあ、なんででしょう？」

おばちゃん、しのぶの口調が感染している。

「耕作さん、かず子さんのご実家が日本料理屋さんだとご存知だったんですよ。それがいきなり食べ物質問をされて口を滑らせてしまったんです。だからすぐに『しまった』っていう顔になったんじゃないかなってわたし、思うんです」

「ええっ、だって転校してきたばかりの初対面の会話やで」

「ですから、耕作さんは初対面じゃなかったんですよ。ただある理由から自分のことを思い出してほしくなくて、かず子さんには初対面のふりをしていたんです」

「まっさかあ。あたし小学校ん時は恋愛恐怖症やったって言うてるやん。思い出されとうないって思われるほど深い関係になった男はおらへんで」

おばちゃんが言うのと妙にいやらしい。

「そのトラウマの原因になったエッチ君はもしかず子さんに再会されても絶対に思い出してほしくないと考えたと思いますよ。だってかず子さんの何倍

ものトラウマを受けたと思いますから」

しのぶは憐憫を含んだような遠い目をした。

「だって、耕作ちゃんやで。K・O・U・S・A・K・U。どこにもエッチな
んか出てこんやん」

おばちゃんはグラスについた水でカウンターにスペルを綴った。

「あれ、伸ばす音はO・Uやなくて、上に山形書くんやなかったっけ」

横合いからバリキがUを消してOの上に、を書いた。

「そうやったかな。どっちにしても同じこっちゃ」

「ん？ちよつと待って。Hがあつたんは名字の方やったんちゃうか？YOSH
IDAってHがあるやん」

「それはないな。あいつ、格好付けて英語風に下の名前を先に書いててんで、
すぐにHいう字を見付けて、わあやらしと思うたからよう覚えてる。そっから
先、名字なんかはよう覚えてないわ」

「多分、そのエッチっていう一文字がかず子さんの目隠しになつていたんだと
思います。実際には和食の一件だけじゃなくて出逢ったばかりの頃には、あれ
れて違和感を感じる事がいくつもあつたんじゃないかなってわたし想像
します。でも、名前にエッチが入らないから二人が同一人物のはずがないとい
う先入観があつて違和感の方に目を瞑っていたんじゃないでしょうか？いず

れにしてもお二人が親しくなられていくにつれて初対面だったかどうかは関係のないことになっていったはずですが。でも、もし耕作さんとエッチ君が別人だとしたら偶然があまりにも重なりすぎていると思いませんか？」

しのぶは記憶を手繰るように目を細めた。

「小学校の時、かず子さんはエッチ君に向かって彼が嫌いな理由を沢山並べましたよね。」

『ひ弱な奴』

『あたしより、喧嘩が弱い奴』

『あたしより、足し算カードが速い奴』

『あたしより、書き取りが速い奴』

『あたしより、足が速い奴』

『親御さんのお金でバラなど買って格好をつける奴』

伺っただけで六つもおっしゃってます。その上で、『男だったら自分の技で勝負しろ。ギター弾いて歌でも歌ってくれたら考える』っておっしゃったんですよね」

「なんや凄まじい記憶力やな、しのぶちゃん」

さしものおばちゃんもたじろいだ。

「耕作さんは空手と合気道で鍛えられてひ弱な男子じゃありませんでした。も

ちろん、本気で格闘したらいくらか子さんでも勝てませんよね。中学から始まった英語は別としたら、数学が苦手、国語が苦手、いつもか子さんが教える立場でした。スポーツ万能のくせに走るのには苦手でか子さんの方がタイムが良かった」

呆気にとられていたおばちゃんの目の焦点が徐々に定まり始める。

「耕作さんは今まで秘密にされてきたみたいですしとても言いづらいのですが、本当に数学や国語が苦手だったんでしょうか？大企業で専務にまで昇進された方です。中学の一般教養は別と言われればそれまでかもしれませんが、会社の経営を任される立場の役員がそろばん勘定できないはずがありませんし、取引先と複雑な文書を取り交わすのが日常業務なのに国語がまるでできないというのも違和感があります。走るのが苦手っていうのはもともとそうです。耕作さんが得意な武道はよりによって空手と合気道。どちらもスピードと瞬発力が重視される流派です。走ること『だけ』が苦手というのはどう考えても変です」

おばちゃんの目の焦点が完全に合ったかと思うと象あざらしの巨体が盛大に震えだす。

「あんのがっきゃ、なめくさって。やっぱりアルマーニで絞めとくんやった」
「ごめんなさい」

しのぶが今にも泣きだしそうな顔になって頭を下げる。

「なんでしのぶちゃんが謝るねん」

「だって本当は耕作さんはずっと秘密にしていたかったと思うから。絶対にかず子さんにだけは知られたくないと思っただけだから。もし、知られてしまったら取り返しがつかないくらい嫌われてしまうかもしれないってずっと怯えておられたと思うから」

言いながらしのぶはとうとう泣き出した。

「だから、ごめんなさい。本当は話すべきじゃないんです。でも、小学校の時の初恋の思い出を今でも大事にしている、あんなに酷いことを言われたのにそれでも諦めずにとうとう思いを遂げて、何十年経った今でもその人が『心の星』だって躊躇いもなく人に言える誠実な人なのに、浮気と誤解されるなんて可哀そう過ぎます」

「いや、浮気ちゆうのは言葉の綾やから」

大人の女性に変身しているしのぶの肩を抱いてやる気はないらしく、おばちゃんにはひたすらうろたえた。

「おんなじことです。耕作さんは小学校の時からかず子さん一筋なのに、それを別の女性と関係があったみたいに邪推するなんて……」

「疑うことは罪です」

牧師のように言って、しのぶはかず子を見据えた。涙を溜めた上目遣いの目が恨みがましく向けられる。

「ひ弱な体を克服するために武道で体を鍛えて、本当は得意な数学も国語も走ることも苦手なふりをして、音楽が苦手なはずなのに血の滲むような努力でギターの練習をしてプロポーズの時に歌をプレゼントしてくれたんですよ。かず子さんがエッチ君に並べ立てた嫌いな男子像が、五つも六つも重複するなんて偶然であるはずがないじゃないですか。耕作さん自身がその言葉を言われた本人だったんです」

「あ、うん」

しのぶの勢いに吞まれて吉田のおぼちゃんには思わず頷いてしまう。それから考えをまとめるように空になったグラスの丸い縁を太い指の腹でしきりに撫でていた。

「……、確かに言われてみたらその通りや。ローマ字のことがあったから考えてみたこともなかったけど、同一人物ちゃうかて目線で見たら思い当たらんこともない。けどなあ、しのぶちゃん。小学校ん時の転校生の名札に入っとった字がエッチいうんは絶対間違いないねんで。だってあたしアルファベットはビーとエッチしか読めんかってんもん。ビーと間違えるはずないし……、って耕作

作ちゃんの中にはビーもないか」

汐が引いていくようにしのぶの頬の朱みが和らぎ、いたずらっぽい笑みを浮かべた。

「さつき、かず子さんとバリキさんがおっしゃったじゃないですか。耕作さんのローマ字表記の中で『お』を伸ばす音をどう表記するか。かず子さんはO・Uとおっしゃり、バリキさんはOの上に、を書くとおっしゃりました。母音を伸ばす音については今でも複数の表記法があつてお二人のおっしゃる表記のどちらも合つてはいるんです。ただこの場合、エッチ君にローマ字を教えた先生が外務省にお勤めのお父さんだったということがポイントだと思っんです」

しのぶは息継ぎをするように猪口を傾けた。

「学校で習うローマ字表記は日本語の表音に沿った国内規格の訓令式というものですが、ただ、外務省で使われるローマ字には独自の外務省へボン式が採用されているんです。この表記の中でもOの長音は特徴的でバリキさんがおっしゃったような、を書くことはしません。K・O・S・A・K・Uと書くか……」

言いながらしのぶはカウンターにスペルを綴った。

「エッチ君が大ファンだった巨人軍に後に現れる大選手が背番号の下に書いていた表記のように……」

しのぶは、K O H S A K Uと書き直した。

「こう書かれていたんじゃないでしょうか？」

「……、そういうことかいな」

しのぶの手元を覗き込んでいたおばちゃんは脱力したように大きな肩を下げて丸椅子を軋ませた。

「あの、まさか今晚お家に帰って耕作さんと喧嘩したりしませんよね。このことで耕作さんを怒ったりしちや……、嫌です」

まるで自分のことで両親が夫婦喧嘩を始めたのを目の当たりにした少女のようにしのぶは怯えた目でおばちゃんを見上げてその手に縋った。

「する……かいな。安心し。あたしは済んだことは水に流す主義や」

おばちゃんはちまつとしたその口の端を上げてしのぶを安心させた。

「あーあ、妙にさっぱりした気分や。なんかお腹空いたな。大将、何ぞボリュームのあるもん出してえな。和食はいややで、あたしも実は好きやないねん。耕作ちゃんが好きな中華がええなあ。あそや、しのぶちゃんも何か食べて。良え話聞かせてもろたお礼や。バリキも何か奢ったろ好きなもの頼み。今日は気分が良えわ」

「肉や肉が良え」と騒ぐバリキにしのぶは「わたし、いかにも日本料理って感じのものを」と控えめな声で遠慮なく注文し、座は一気に賑やかになった。炭火の上で炙られている大振りの鶏肉からエスニックの強い香りが立つ。フ

ライヤからは揚げ物が立てる小気味良い音が客達の胃をくすぐり、時折炭火に落ちる鶏の脂のジュツという音が殊更に耳を刺激する。主人は調理台の前に立ち、葱、生姜、大蒜と薬味を微塵に刻む。小鉢に合わせられたそれらの薬味に赤や青の瓶に詰められた中華の調味料がブレンドされていく。煙を立てて熱くなっている中華鍋に揚げ物が放り込まれ盛大な音を立てる。振りかけたごま油が香ばしい匂いを放つ。ブレンドされた調味料を回しがけた瞬間、緋色の炎が大きく舞って客達に料理の完成を告げた。

「お待ちどおさん。海老チリや。今日のテーマやし辛い目にしてあるで」

白い中華皿にこんもりと盛られた海老チリはチリソースと豆板醤の赤を帯びて艶やかに輝いている。

「うわっ、大将愛してる」

歓声を上げて箸を取るとおぼちゃん海老の山に踊りかかる。

「バリキはタンドリーチキン風いうんかな。本式の壺焼きでないけど炭火で焼いたんも旨いで。俺は骨つきの方が好きやけど。バリキはボリューム重視やろ。もも肉の塊んところを使うてみた」

主人の説明を半分も聞かずにバリキは切り分けられた大振りのもも肉と格闘している。しつかり漬け込まれた香辛料とヨーグルトの酸味が口一杯に広がりバリキは思わず叫んだ。

「ビール。おっちゃん、ビールちょうだい」

「しのぶちゃんには地味目やけど茄子の炒め煮を出させてもらお。これな俺のお袋が夕飯によく出してはった惣菜やねん。出来立ても悪うないけど一晩おいた方が味が染みてて旨いと俺は思う」

冷蔵庫から取り出された黒い深鉢はひんやりと冷たくしのぶの指先をくすぐった。賽の目に切られた茄子は油を帯びて艶やかに光っていて、口に入れると醤油の濃い味と鷹の爪の辛さが舌で踊った。しのぶは思い出したように徳利を振って空になっていいることを確かめ、黙って主人に差し出した。主人も黙ったままにと笑って頷いた。

「しかし今日はすっごい日やったなあ。まさか暇潰しにこの店に来た時はこんなことになるやなんて思いもせんかったわ」

「世の中何が起こるか分からんちゆうこっちゃ」

本日二度目になるバリキのセリフも今度は説得力がある。少しずつ目減りしていく海老チリを名残惜しげに眺めながらおばちゃんは六杯目の焼酎を呑む。「けど、しのぶちゃん、あんた凄いやなあ。とてもあたしと同じ人類とは思えん」

そら思えんで。タンドリーチキンで忙しくなければバリキがそうツッコんだかもしれない。

「なあなあ、ことのついでやん。耕作ちゃんがなんで風に吹かれてを歌うてくれんようになったんかも推理してえな」

未だに大人バージョンのしのぶにおばちゃんは恐る恐るにじり寄る。迫り来る巨体に茄子を喉に詰めそうになったしのぶは激しくむせた。

「いえいくらなんでも、人の心の中のことなので……あの、無理です」
小さな胸を押さえ息を整えながらどうか返事をする。

「そうかあ？残念やなあ。長年の謎やねんけどなあ」

「あの、歌われない理由を耕作さんに直接尋ねるのが早道だと思うのですけど」
「それができたら苦労するかいな。元々、音痴やろ。家でも音楽の話は御法度やねん。仕事でカラオケ付き合わされても本人は絶対歌わへんし、あの曲だけは特別や思うから思い出したみたいに水向けるねんけど『そんな曲知らん』言うて決まって不機嫌になりよるねん」

おばちゃんは「あーあ」と大きな溜息をついた。が、いきなり次の瞬間天啓を得たようにしのぶを振り返った。

「そや、しのぶちゃんにインスピレーションを与えたら何ぞ思い浮かぶんちゃうやろか？おばちゃんが今から風に吹かれて歌うからそれをしのぶちゃんが聴いてやね……」

「おっちゃん、急用思い出した。これ包んでくれ」

バリキが涙目になって立ち上がる。

「何いうてるのん。おばちゃん、歌が聴けるなんて一生にいつぺんあるかないかの貴重な体験やで」

「一生いらん。何が悲しうて呑み屋で臨死体験せなあかんねん。それに確信持つて言うけど、今聴いてしもたら当分俺の夢枕におばちゃんが立つ」

じつとバリキを見据えていたおばちゃんの目が底意地悪く笑った。たじろいでバリキは後ずさりする。身構える隙も与えず、いきなりおばちゃんの口から英語の歌が流れだした。

「ハーメニー、ヤーズ、マスタマントウンイース。フォートウーウォートウー
ダシー」

かなりブロークンな英語だったが意外に味のあるアルトが響いた。拍子抜けしたバリキは何事もなかったかのように丸椅子に戻る。しのぶは目を閉じて首でリズムを取りながらおばちゃんの歌に耳をすませている。やがて、その桜色の小さな唇が何やら笑まし気に綻んだ。

「ヒズアンサマイフレン、イズブローインザウイン。ヒズアンサイズブローインザウイン」

一コーラス歌ったところでしのぶが小さく拍手をし、おばちゃんがまんざらでもない顔で笑った。

「今度ぜひ、耕作さんも混ざって頂いてここで呑みませんか」
おばちゃんが口を開く機先を制するようにしのぶが誘った。

「そら願ってもないけど一個だけお願い」

「はい何でしょう？」

「その時は、ポニーテールとメガネ付けといてな」

子供がねだりものでもするような目付きで言うとおばちゃんはしのぶに片手拝みした。

（第三夜 了）